

持続可能な地域連携型プロジェクトの検討 ～社会関係資本の醸成に着眼して～

須賀由紀子 *

* 現代生活学科 地域・生活文化研究室

Consideration of Sustainable Regional Collaboration Projects ～ Focusing on Fostering Social Capital ～

Yukiko SUGA *

**Department of Studies on Lifestyle Management, Jissen Women's University*

This paper focuses on the concept of social capital and examines the significance of community-based project education to gain insights into sustainable regional development and community-based collaborative activities by students. After understanding the meanings of “individual assets” and “collective assets” as the basic concepts of social capital, we examined the relations of social capital and regional cooperation activities from three perspectives: “relevant population,” “intergenerational inheritance,” and “social education.” In addition, we considered the significance of community collaboration project activities from the perspective of social capital formation by selecting practical examples of students’ efforts to revitalize local communities.

In conclusion, the significance and role of community-based project education in fostering social capital are 1) the acquisition of awareness as an agent of regional revitalization, 2) the possibility of creating a relationship of trust with local people and creating local self-reliance, 3) the formation of a community that hopes for the sustainable survival of the local area, and 4) the value of being the “parent generation” that creates an era.

Keywords : social capital (社会関係資本), project-based learning (プロジェクト型学習), regional partnership (地域連携), sustainable relationship (持続可能な関係), universities (大学), student activities (学生活動)

1. はじめに

本稿の目的は、大学生の地域活動について、「持続可能な地域づくりと学生による地域連携活動のあり方」という問題意識から、地域連携型のプロジェクトおよびそれに伴う学生の学びについての検討を行うことにある。

大学の使命としての研究と教育に加え、大学の「第3の使命」としての社会貢献の観点から、大学と地域の連携が近年盛んになっている。また、学生の主体的な深い学びとしてのアクティブラーニングの推進、生涯にわたる学びの力の基礎となる社会人基礎力としての汎用的能力の育成などの観点からも、学生自身が地域に入り、地域住民や行政と一緒にやりながら、地域課題を考え、その解決に向けて、地域活性化のイベントを行ったり、地域ブランディングや商品開発などに取り組むことは、教育手法としてすっかり定着してきている。地域での実践的な学びの価値については、「教育力」や「地域活性」

に与える影響などの観点からの報告が多くみられる（古川 2022etc.）。学生の地域における課題解決プロジェクトが、「多様な住民との関わりや交流経験を生み、継続的に当該地域と関わりをもったり、スポークスパーソンとなってくれる」という可能性から、いわゆる「関係人口」（田中 2021）の拡大に寄与し、中長期的なスパンでの地域の維持・持続可能性に寄与することも期待されている。このような流れの中、どのように学生に地域に関わる意識づけや働きかけをするか、その方法の構築がフィールドワーク教育の「深化（進化）」に必要な段階を迎えている（林 2019）。

この点について、大学と地域連携は「マンネリによる交流疲れ」「提案で終わる活動」という懸念も指摘されており、「継続的実践活動への大学内承認の必要性」「地域と大学による共同資金確保」「コーディネート機能を持つ人材やセクションの設置」の課題対応が必要であ

る（中塚・内平 2014）。洲本市と龍谷大学の域学連携事業の事例報告では、「学生教育アプローチ」から「社会的事業アプローチ」（小水力発電やため池フロートローラー発電など、地域資源に対する新たな価値付与による価値創造）へと展開をすすめ、連携する大学の拡大という横系と、現役生と卒業生を結ぶ縦系を編むことで、持続的な発展を生む構造を作り出している。このような域学連携の「社会的事業化」は、地域連携型プロジェクトを持続的なものにする方向性を示している。学生は毎年変わっていても継続をする社会的価値が、持続的な体制を生んでいる（櫻井ほか 2021）。

こうした大学と学外連携の「質」の議論の中で、日下・小原（2023）は、大学と地域・産学官と連携した教育活動をすすめていくにあたり、数多く実践されている教育手法としての PBL（＝ Project Based Learning）に着目し、その現状と課題について詳細な検討を行っている。それによれば、多くの PBL の目的が「社会人基礎力」の育成に重点が置かれていて、「連携先と協働して一体何を目指すのか」が示されておらず、「PBL のスタイルを取り入れた学習を実行すること」が目的化している傾向が把握されている。PBL といえば学生を「外に連れていく」こととなり、「PBL の位置づけが学生の能力向上とその元となる手法の遂行」になってしまっている。この状況をふまえ、PBL が目指すべき成果に対する評価方法の検討が必要であり、「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」の観点から、学生と地域社会の関係性や評価を測る指標を考えることが有用ではないかと指摘している。

この「社会関係資本の構築」という視点は、地域を未来世代につなぐ持続可能な地域づくりに必要なことであり、大学と地域の連携プロジェクトを持続的な取り組みへとつなぐ重要な要素となると考えられる。

本稿は、このような問題意識から、学生の持続的な地域連携活動のあり方を、「社会関係資本」の観点から検討するものである。社会関係資本は、幅広い学術領域からの検討がなされ、社会科学の重要概念の一つとなっている。本稿においては、多くの社会関係資本の議論の中でも、地域づくりと社会関係資本の関係について検討した先行研究の知見をもとに、「地域の持続性への寄与」を高める地域連携型プロジェクト実践の意義とあり方を検討する。また、学生の実践的な地域活動の事例の中に、社会関係資本形成の視点を考える。取り上げる実践事例のフィールドは、過疎化のすすむ中山間地域における学生の地域活動である。課題先進地域である中山間地域の地域再生に学生がいかに関与するか、そこに社会関係資本形成の視点をいかに読み解けるかは、中山間地域に限らずその他の地域にも敷衍できると考えてのことである（二階堂 2020）。

以上を背景に、本稿は以下のように構成する。まず、

続く第 2 章では、社会関係資本の議論の中で、「関係人口」「世代間交流」「社会教育」の観点から社会関係資本について検討された研究の知見をもとに、学生の地域活動や地域連携型プロジェクトのあり方や意義を考える。第 3 章では、筆者のゼミ学生が取り組んだ都市農村交流プログラムの実践事例をもとに、そのプログラム評価から、学生の気づきや地域への関わり方の意識の変化を捉える。第 4 章では、第 3 章で取り上げた事例の考察として、社会関係資本の視点から地域連携型プロジェクトの意義と役割を考え、第 5 章では本稿のまとめと課題を述べる。

2. 「社会関係資本」の議論からみる地域活動の意義

2-1. 社会関係資本の基本概念から

稲葉（2012, 2021）によれば、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）は様々な立場から定義や議論が行われているが、おおむね方向は一致しており、「人々の間の協調的な行動を促す『信頼』『互酬性の規範』『ネットワーク（絆）』を指す」（稲葉 2021:8）とする。

社会関係資本には、個人レベルで、個人が持つネットワーク（私的財）に重きを置く場合と、社会全体としての協調活動の基盤となる信頼や互酬性の規範に重きを置く場合（集合財）の二面がある。加えて、個人レベルの他に「コミュニティレベルでの社会関係資本」がある。それは、「国、都道府県、郡、市町村、旧村、中学校区、小学校区、町丁目、隣近所、職場、同窓会、運動や趣味のサークル、NPO あるいは特定の人を中心とした半径 100 メートルといった空間的な距離で捉えた集団」など、さまざまなレベルや形態があり、このグループ内の規範や信頼を醸成すると、準公共財となる（稲葉 2021:12）。つまり、「社会関係資本は必ず、個人レベルの私的財としての社会関係資本と、コミュニティレベルの（準）公共財としての社会関係資本が、対になって存在する」「社会関係資本を論じる場合は、個人とコミュニティの双方が同時に対象となる」のである（稲葉 2021:13）。

この「個人財」という個人が持つ社会関係資本の豊かさの側面と、個人がつながることによって広がる「（準）公共財」としてのコミュニティの社会関係資本の豊かさの側面との両面が、学生の地域活動を考える上で、重要であろう。すなわち、地域と関わることによって、その個人自身の社会関係資本（個人間のネットワークや互酬性・信頼感への思い）が豊かになること、その結果、個人が関わる何らかのコミュニティが互酬性・信頼感に満ちていくこと、この両者の関係が深まるような地域連携型プロジェクトのあり方を目指すということになる。

社会関係資本は、それが個人にとって「生きづらさを生む」という側面があることに留意する必要があるものの、基本的には「健康、教育、地域の安定、災害

時の対応能力などの水準の向上」に有用であり（稲葉 2021:16）、とくに人々の健康に好影響を与えることはパネル調査結果として支持されている（稲葉 2021:17）。また、幸福感の研究においても、社会関係資本が豊かな人ほど、それが高い地域に住んでいる人ほど、幸福感が高いとされる（内田 2020 : 112）。特に「関係性」を重視する幸福感に根ざす日本の文化においては、良好な社会関係資本を個人が有し、それを向社会的行動につなげていくことが、住みやすい地域づくりに有意に働くという（内田 2020 : 109）。

このような知見から、良好な社会関係資本を有することは、個人にとっても社会にとっても、良好な状態（ウェルビーイング）をもたらす。これからの地域活動のあり方を、社会関係資本の観点から検討することは、意義のあることといえる。

2-2. 関係人口と社会関係資本

次に、地域活動と関わる社会関係資本の議論として、「関係人口」論を取り上げる。「関係人口」は、人口減少がすすむ地域、特に過疎化が深刻な地方の地域活性化に関わる概念として、近年注目を集めている。従来の「交流人口」に代わる言葉として流布し、2020 年の「第 2 期創生総合戦略（改訂版）」では、「特定の地域に継続的に多様な形で関わる者」と定義され、「オンライン関係人口」「バーチャル関係人口」の概念も提示されるに至るなど、地方創生のキーワードとなっている（中山 2023）。関係人口は、「人口」という言葉から想起される数量的概念ではなく、個々人の関係性の「質」にアプローチするもの（田中 2021 : 60）で、ふとしたきっかけからある地域に興味を持つ「よそ者」でありながら、地域への関わりを主体的に継続させていこうとする人のことである（田中 2021 : 77）。地域に継続的に関わる人を増やし、地域の自立につなぐ関係人口の創出・拡大は、地方創生の切り札である（内閣府 2023）。

地域を再生する主体となる関係人口形成のプロセスについて、田中（2021）は、鶴見和子の「内発的發展論」のキーパーソン論に照らして、「主体となるキーパーソンの存在が大事である」とする。そして、社会関係資本の概念を用いて、次のように説明している。

- ①関係人口が地域課題の解決に動き出す段階
（関係人口が地域住民との間に社会関係資本を構築）
- ②関係人口と新たな地域住民との間に信頼関係ができる
（社会関係資本が別の地域住民に転移）
- ③主体性を獲得した地域住民が地域課題の解決に動き出す段階
（地域住民が別の地域住民や関係人口との間に社会関係資本を構築）

つまり、関係人口として地域に関わる人の主体的なあり方が、その地域の中のコアな人に影響して、地域住民

自身の「内なる主体」を形成し、やがては、住民自治を活性化する。地域に主体的に関わり関係人口となった人から、地域に水平的なネットワークが生まれ、その結果として、公共財としてネットワークが豊かになり、互酬性や信頼感が感じられる社会関係資本の豊かな地域となり、地域への誇り・愛着にもつながっていく。従って、地域再生に大事なものは、ある地域に強い興味を持って、地域課題に関わろうとする関係人口となる人の存在である（田中 2021 : 251-259）。

一方、関係人口となる人自身も、「その土地の自然が好きだ」「温かい人に出会う」ということが、地域へ関わるきっかけであり、地域の人との互酬性の関係の中で、自己のアイデンティティの獲得をしていくことができる。このことは「孤立化社会」（石田 2018）ともいわれる現代において、「個人のアイデンティティの揺らぎ」という課題解決の一つの手立てとなると考えられる。地域の暮らしや自然、歴史などへの愛着の気持ちから、主体的に地域に関わることで「個人財」としての社会関係資本の豊かさを得る。個人が地域への関わりを深めていく中で、結果的に、地域に自立的なコミュニティが生まれ、地域自身にも「共有財」としての社会関係資本の豊かさが実現されていく。

この図式は、学生が地域連携活動をすすめていくプロセスにもあてはめることができる。社会関係資本に照らしてみる関係人口論から浮かび上がるのは、学生が地域との関わりの中で、ある地域への深い愛着を持つきっかけを持ち、自身のアイデンティティとともに地域への思いを深めること、そして、その思いを地域の方にも広げ、地域再生にいかにつなぐかが課題ということになる。

2-3. 社会関係資本の世代間継承と社会教育の視点

「関係人口」は、地方創生の中で生まれた概念であるが、そもそも住みやすい地域づくりにおいて、地域コミュニティのつながりや信頼関係・互酬性は大切であり、そのための支援の政策は重要である。

この点に関して、地域の町会・自治会の弱体化は多く指摘されるところである。では、今後の地域の社会関係資本の醸成はどのように考えていけばよいのであろうか。

要藤（2018）は、定量データ分析をもとに、社会関係資本の世代間継承について論じている。それによれば、個人が有する社会関係資本は、子どもの頃の環境や経験に影響され、継承される傾向があるため、親子で地域活動に参加をするような活動内容やイベントの工夫などは、次世代が地域活動に参加する機会を増やすことにつながる。また、地域コミュニティの社会関係資本の豊かさは、個人の社会関係資本形成にも正の影響をもたらすことから、地域活動を担う団体などが連携して、地域内

の活動を高めていくことは有効である。社会関係資本の循環形成の観点をふまえると、親への意識づけ、親子が参加しやすい地域活動の工夫・促進は大切なことである(要藤 2018 : 235-242)。

また、ある地域で形成・継承された社会関係資本は、人の移動を通じて、他地域に波及的な効果をもたらすという(要藤 2018:243)。このことは、学生が地域連携活動の経験を通じて得た社会関係資本も、その学生が卒業し、他地域に移動しても活かされていくことを示唆する。在学中の地域活動の中で得た経験を、地域を越えてつなぎ、広げることで、個人としての社会関係資本の豊かさが形成され、かつ、地域と地域が、空間が離れていても、互いにネットワークを広げ、支え合うという関係性を生む。「ソーシャル・キャピタルの形成・継承を促すための各地域での取り組みが、他地域への波及効果を持つ」(要藤 2018 : 244) のであれば、学生の地域活動を支援していくことは、人口が減少していく中で、地域と地域が支え合う成熟型の地域社会に向けて、重要な意義を持つと考えられる。

ところで、上述の「親世代が地域に意識を持って関わり社会関係資本を高める」ために機能しうるのが、社会教育であろう。この社会教育について、「地域社会づくり」という問題意識から論じた荻野(2022)は、住民が「地域社会に関わるための能力を育む」(荻野 2022 : 53) のが社会教育であるとし、そのあり方を、社会関係資本を用いて分析している。それによれば、社会の中にある様々な関係性・相互作用の中で個を育むのが社会教育の目指すところであり、「関係基盤」となる中間集団(サークルやグループなど)に個人が所属し活動することで、個人のもつ社会的ネットワーク(社会関係資本)が広がり、地域での話し合いや地域の活動への参加が促される。従って、これからの「地域社会の作り方」としては、サークル・グループなどの「関係基盤」を地域の中に多数創出していくこと、そして、それらの相互のつながりを紡いでいくこと、ただし社会関係資本の醸成には時間がかかるため中長期的な戦略を持ち、地域ネットワークの結節点として公民館職員の役割が期待されること、などが結論づけられている。

社会における主体的な学びは、生涯にわたる学習のテーマでもあり、先の関係人口論に照らしてみれば、それは「地域」との様々な関係性、たとえば自然資源、人的資源、歴史資源、ネットワークなど様々な関係性の中で獲得しうる。生涯学習は、「人間である」ことの豊かさを獲得していくことを狙いとし、学ぶことによって主体を確立し、市民としての立場・役割を得ていくプロセスである。地域での活動は、住民の主体形成と社会関係資本の形成を促し、地域の中に「生きたコミュニティ」ができる。そのコミュニティの中には、日常生活に関連した学習、「ローカルな知」がある。それに触れること

で、個人の主体性や自発性が引き出されていく。こうして「関係の変容に基づく個人の変容」(荻野 2022:78)を生むところに、これからの社会教育の役割がある。

以上の社会教育の考え方を地域活動の場に敷衍してみると、学生が行う地域活動から地域存続を願う目的的なコミュニティが生まれる。その中に所属することで、個としての主体が獲得されて個人が変容し、相互の信頼や互酬性の規範の形成が行われる。この「中間集団」が重層的に広がっていくことが、地域社会の社会関係資本となると同時に、個人にとっても豊かな社会関係資本の獲得につながっていく。そうした関係性に意味を感じる「大人」(親)が増えていくことが、社会関係資本の世代循環にもつながり、豊かな社会関係に満ちた社会を作っていくと考えられる。

これからの持続可能な社会のあり方を論じる諸富(2022)においても、成熟型社会のあり方として市民の「学習」がキーワードに挙げられている。市民が、自分たちの持続可能な地域づくりのための主体者となることで、小人数・省資源でも生き抜く社会事業を発想・実現していく。持続可能な社会づくりに向けて、地域活動をとおして、主体的に活動をし、豊かな個人ネットワークと、社会的サポートネットワーク、そして、互酬性への信頼と、市民活動の場を生涯にわたり自分自身が持つことは大切であり、そこに気づき動機付けを持てるような、地域連携型プロジェクトが望まれるといえよう。

2-4. 小括

以上、「関係人口」「世代間継承」「社会教育とコミュニティ」から社会関係資本の深化・構築への知見を捉え、地域連携型プロジェクトの視点を検討してきた。では、地域連携の活動(一過性の活動ではなく、新しい社会創造・価値創造の意義に動機づけられるような活動)は、プロジェクトに関わる学生にとって、また地域の現場において、実際にどのような気づきをもたらすであろうか。

次章では筆者が取り組む地域連携活動を紹介し、プログラム関与者の「学び」「経験」の中に、上記に述べた要素をどのように見出しうるかを検討する。

検討の視点は以下の点となる。

- ① 地域再生の主体としての意識獲得の可能性。個人が有する社会関係資本とアイデンティティの獲得。それが、地域の暮らし、守るべき自然や歴史といった地域文脈に動機づけられ根差していること。ゆえに、地域との本質的な信頼関係があるということ。
- ② 地域の人たちとの信頼関係を生む。地域の人の内なる力、自立を生み出す可能性があること。(互酬性・信頼関係の深化)
- ③ 関わる地域の持続的な存続を願うコミュニティの

形成、自分もその一員になるということ。(水平的ネットワークの拡大)

- ④ 学生たちが、次の時代を作る「親世代である」ということの価値。(世代間継承、中長期的な継承性)

3. 地域連携型プロジェクトの実践から

3-1. 対象とするフィールドについて

ここで取り上げるプロジェクトは、新潟県十日町市布川地区をフィールドとするものである。当地区には、地域創生、地域と地域がつながり支え合う関係づくりによる地域自立社会形成の実践フィールドとして、当ゼミが2015年から関わりを持っている(須賀2018, 2022)。歴代のゼミ学生有志が、その年ごとのテーマを持って、集落維持の活動と地域づくりの活動、また、キャンパスのある日野市民有志と現地とをつなぐ活動の推進を行っている。現在では、日野市立カワセミハウスにおいて、年4回の「布川ファーマーズマーケット」を開催し、季節ごとの地元野菜と特別栽培の棚田米を販売し、布川に興味を持ってもらう活動が続けている。

3-2. 2023 活動概要

2023 年度は、学生発案で、学生が現地の魅力を案内する滞在型プログラム「布川ステイプログラム」に取り組んだ。これは、ゼミ生の中で、布川の人と暮らしに引き付けられた学生(関係人口の一員)が主導して、布川の良さに触れてもらう滞在型のプログラムを作り、いわゆる関係者だけでなく、一般の方にも広く募集して応募して下さった方に、布川で過ごしてもらうプログラムを考え、実施したものである。4年生学生3名がチームになってすすめた。

学生が企画したプログラムのねらいと内容は下記の通りである。

【ねらい】

- ・都市農村交流をすすめる
- ・参加者にとってのメンタルヘルス、地域の意識化、布川の良さの認識化
- ・地域と人をつなぐ学生の役割の確立

⇨滞在型プログラム(ステイプログラム)の目的として、①布川を訪れることで体験的な都市農村交流を実現すること、②布川での暮らしを感じてもらうことによって、身体的、精神的に向上すること、③布川で地域や人と関わることで地域のことを意識するようになり、都市部での地域のことも考えること、④大学生が地域の人と子どもの間に入り、関係をつなぐ役目を果たすこと、以上4点におく。

【概要】

観光、暮らし、歴史、イベントの4つの分野に分け、それぞれを組み合わせ参加者に合ったプランを実行

⇨布川の方たちとの交流と、自然を感じることができる体験活動を企画し、プログラムの最後にゲーム性ある振り返りワークショップを企画し、思いを深める。

【日程】

夏祭り、道普請という集落行事が行われる1週間程度の期間を設定し、1泊2日もしくは2泊3日のプランを、参加者の個々のニーズに応じて作成

【ターゲット】誰でも参加可能

【期待される成果】

◎参加者にとって: 布川を知ってもらい、布川を好きになってもらう。そのことで、ポジティブな気持ちに子どもも大人もなることができる。地域の存在を意識化する。

◎布川にとって: コロナ禍でできなかったイベントの復活と賑わいづくり。子どもと接することで、地元のお年寄りが元気になる、活力の創出・魅力の再発見

→これらにより、両者のリアルな交流の場による直接的な都市農村交流づくりのきっかけとする。

3-3. プログラム準備について

学生主体で、布川を全く知らない人に案内をする本プログラムについて、具体的な打ち合わせを始めたのは、2023年5月に現地に行つてのことである。その後、6/3-4に、田植えと棚田地区の散策(十日町市自然里山博物館キョロロ学芸員の方による解説付きツアー)による現地の棚田事情と自然循環型社会づくりのための知識習得、地元神社にて田植えを無事に終えた神事を行っている集落の方に交じつての交流など、現地との関係を深めた。続く、6/17~19には、学生のみで現地での準備活動を行い、宿泊場所となる一軒家から徒歩圏内で歩ける場所についての詳しい内容確認を実践して把握したり、歩く中で広がる棚田の風景、集落を自分たちで歩いて地元の方に飛び入りで暮らしの様子についてのお話を伺うなどの現地活動を行った。日中の活動後には、夜遅くまで振り返りを行い、ステイプログラムの日程内容の検討を行った。

その後、ステイプログラムの実施内容の概要を決め、募集用チラシを作り(図1)、日野市カワセミハウスに掲示、一般からの募集をした。募集後すぐに、2組の家族から参加希望があった。学生の自主運営による初めて企画であったため、安全をとって、募集はここで打ち切った。参加希望の親子には、学生から連絡を取り、オンラインと対面で直接お会いして、プログラム内容の説明や、希望活動内容を伺い、現地までの交通の確認、食事配慮の必要性の有無など学生が責任を持ってすべて確認した。



図1 プログラム案内のチラシ

7/15～18には、筆者も一緒に同行する形で、現地に事前準備に入り、食材の調達場所や値段の確認、スティップログラムの学生ワークショッププログラムとして取り入れる都市農村交流カルタを地元の方と行つての交流と信頼関係づくり、布川地区の立体地形図マップを使ったワークショップの準備活動などを行った。立体地形図マップは、地区全体の地形、棚田の位置、集落の現状などが把握できる模型図で、これを用いて集落の今後について、地元の方と話し合うワークショップを学生が開催をして、集落の暮らしに対する誇りの思いなど聞き、関係を深めた。

7/24～26には、学生のみで現地活動を行い、棚田・集落散策プログラムのルート確認、散策中の案内説明の文言作成と、それを実際に口で出して言いながら歩いてみる予行演習、バーベキューの予行演習、必要な物品確認、プログラムの流れの確認などを行った。一方、7/29には、日野市カワセミハウスで布川ファーマーズマーケットを開催し、日野市と布川の交流関係を学生がつなが活動も併行して行った。

3-4. プログラム参加者の受け止め

学生発案による「布川スティップログラム」は、2023年8月3日～12日の期間、各参加者の希望に応じる形で1泊2日または2泊3日のプログラムを連続して実施した(図2)。参加者実績は以下のとおり(表1)。参加者からは「美しい風景に出会えた」「大学生の案内がよかった」「大学生のワークショップ」など評価が高く、ねらいどおりの満足のいく内容となった(図3)。

表1 プログラム実施日程と参加者

8/3-8/4	日野市関係者(小学生女児1人と祖母)、学生5名
8/5-8/6	学生7名
8/6-8/7	一般参加家族1組(幼児男児1人と父親)
8/7-8/8	日野市カワセミハウス館長
8/7-8/9	日野市カワセミハウス協議会会長
8/9-8/11	一般参加家族1組(小学生男児2人と母親)
8/11-8/12	卒業生OG

図2 スティップログラムの一例

■参加者の受け止めから

- ・「布川プログラム」の大切にしていきたいところを、学生の皆さんが伝えてくれて、印象に残る思い出づくりをすすめてくれた。
- ・東京では体験できない自然と虫がたくさんいる環境、満天の星に感動しました。
- ・集落内の散策が、とても印象に残りました。
- ・全く初めての人たちとの付き合い。
- ・棚田の景色、駅に着いてから最後まで、すべてがよい思い出です。
- ・棚田散策、昔ながらの棚田が本当に素敵でした。
- ・夜のBBQが印象に残っている。小学生と一緒に肉やマッシュマロを焼いて、楽しい時間を過ごすことができた。
- ・農業を継ぐ人が減っていることを実感した。美味しいお米や美しい風景を今後も守るために、若い人の力が必要だと思った。
- ・軒家の暮らし。エアコンの中にずっといる生活をしていたので新鮮だった。
- ・棚田は教科書でしか見たことがなかったので、実際に見ることができてよかった。結構急な坂なので、農業をしている人は大変そうだった。
- ・棚田探索をして、実際に棚田を近くで観察したことが印象深かった。

参加者への事後アンケートの結果から、「地域のことを考え」「日本の自然や農業のことを思う機会となり」

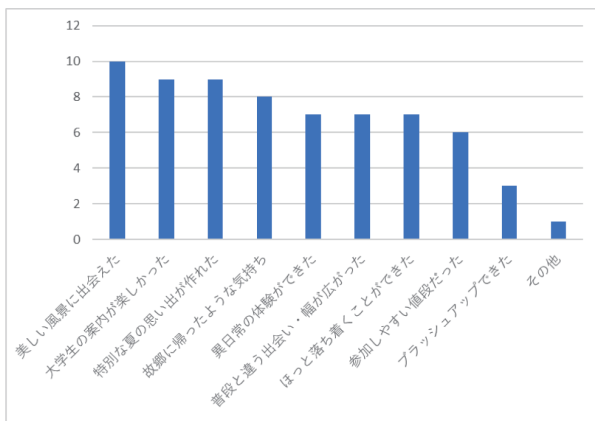


図3 本プログラムの参加者評価（複数選択可）

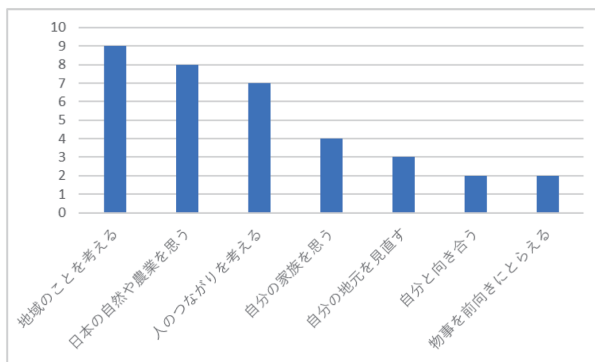


図4 プログラム参加意義についてどう思ったか（複数選択可）

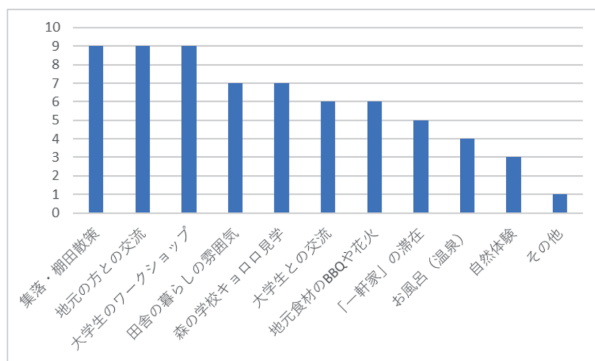


図5 参加者が選んだ楽しかったプログラム（複数選択可）

「人のつながりについても考える機会となっている」というクオリティを持つプログラムであったことがわかる（図4）。

このような評価を得た背景には、この地域を知らない人につながぐという思いを持った「大学生の案内」の中で、「集落・棚田散策」をし、「地元の方との交流」もある中で、地域の支え合いの姿と、日本の自然の美しさや農業維持の大変さなどを知ったということが背景にあると思われる（図5）。プログラム実施に携わった「大学生」の案内、この土地の人の暮らしや地域文脈に触れてもらいたいというプログラムづくりの配慮が、参加者の

地域理解や、日本の自然や農業を考える、人のつながりを考えるなどの意識を呼び起こすことにつながった可能性があり、こうした要素は、参加者自身の社会関係資本の豊かさにつながりうる内容であったと評価できる。また、このようなプログラムを実施しなければ、小さな農村である布川という土地について知る人は増えないため、このプログラム実施が、地域にとっても関係者ネットワークを作り出すことにつながる可能性を持つという意味で意義があるのではないだろうか。

こうして、この土地への興味と、また自分自身が関係する地域への興味関心を持つということが、地域の社会関係資本を豊かにしていくきっかけとなる。そうした可能性を含むプログラムであったことが、参加者の振り返りアンケートから窺える。

3-5. 企画運営学生の受け止め

本プログラムの評価は、実施する過程の中で得られたことは何かということに意味がある。そのため、プログラムのアウトプットとしての出来栄えについてではなく、アウトカム（成果＝変化をどう捉えるか）についての評価を、企画運営を行った学生3名に振り返り記述してもらうという形で行った。視点としては、安田（2011:176）によって示されている枠組み①行動・行為の変化 ②意識・意欲の変化 ③認知・態度の変化 ④知識・理解の変化 ⑤興味・関心の変化 ⑥スキルの変化 ⑦状態・立場の変化の7つの視点から、各400字程度で記述してもらった。

その中から、①地域への主体的な関わり意識の醸成、②地元の方とのかかわり方の変化、③この地域との関係の発展・存続への思い（地域連携における大学生の役割）について書かれていることを取り上げ、こうした地域連携型プロジェクトが、参画学生にどのような気づきをもたらすのかを、社会関係資本の視点をふまえて考察する。

以下の記述の学生Aは、企画運営の中心を担ったリーダー学生である。学生Bは、学生Aを行動面・判断面含めて支えた副リーダー的存在である。学生Cはフォロアーシップに優れた学生、という特徴を持つ。

① 地域への「主体的な関わり」意識の認識

【学生のコメントから】

・学生A「布川が抱えている地域課題の深刻さが現実さをより深く感じ、意識が強くなった」「プログラムを通して、布川という地域を再認識し、そのおかげで地域をより大事にしていきたい、自分たちのできることを、残せるものは精いっぱい行いたいという気持ちが強くなった」「過疎化における現状を目の当たりにした」「今見ている風景や自然は、決して当たり前のものではなく、地元の人の手が入ってこそである、と意味深く見るように

なった」「お互いが相互関係で支えあいながら暮らしが成り立っていることへの理解がより一層深まった」

- ・学生 A「布川という地域が好きという感情から大切にしたいという感情に変化」「学生のプログラムに参加してくれる人がいたこと、地元の K さんが都市の方を布川に呼ぶことを望んでいたことが私にとって全てであり、絶対に『楽しかった』と思っていただきたいという強い気持ちがプログラムを進める力となった」「自分たちの活動を応援してくださっている方がいることは、この活動には意味があることだと感じる理由の 1 つ」「プログラムの企画運営を通して布川という地域を深く知ることができたこと、多くの時間を布川で過ごすことができたことで、些細な地域の変化や自然の変化にも気づくことができ、短期滞在では体験できないことを体験できた」
- ・学生 B「長期にわたって滞在してみることで、なくなってほしくない、大切な場所だという思いが強くなった」「この場所が漠然と好きだったが、今は人の手が加わっていて集落全体で守っているから素敵な場所なのだと感じている」「ネットに本来あるべき生活が塗り替えられているように感じることが多々ある。そのようなモヤモヤとした感情を持つことなく、支え合いながら、自分のため家族のため、自然のために、等身大で暮らすことができる気がした」
- ・学生 C「(棚田案内を通じて) 人の田んぼを管理している人がほとんどで、手に負えなくなると返すしかなくなり、耕作放棄地が増えている。人材の不足が深刻であることを改めて実感」

【考察】

土地のことを、自分たちが内側から捉え、その内容を、参加者に「お話ししながら触れてもらう」「解説しながら見てもらう」というプログラムを学生自身が考え、準備し実施したため、地元の方への思いをより深めることができています。そして、「多くの人の助けを得た」ということから、互酬性や信頼感の深まり、その結果、愛着の思いの強まりが感じられる。その背景には、土地の人の暮らしの姿勢に対する共感の深まりがあることがわかる。

「大切にしたい」と思える地域に出会って、「多くの人に助けられている」という感謝の念は、自身の社会関係資本の豊かさにつながると同時に、地域への主体的な働きかけも呼び起こす可能性につながる。

② 地元の方との関わり方の変化を自覚

【学生のコメントから】

- ・学生 A「地域の方々に協力していただいたプログラム内容が多かったため、地域の方との距離がより縮まったように感じた」「様々な地域の方たちとの関係性を築くことで、地域ならではの地域の方との付き合いというも

のを非常に感じることもできた」

- ・学生 B「布川の方は目上の方。お母さんともお父さん方とも話す機会があるので、場の様子を見ながら、失礼のないように、自分の気になることを質問したり、理解できないことをそのままにせず聞き返したりできるようになった」
- ・学生 C「学生がたくさんいると華やかになっていいね、雰囲気が明るくなる」とお母さん方に言っていただき、夏祭りのカラス踊りでは、歌手さんの歌に合わせてお母さんのお手本の踊りを見ながら一つの円になって踊れたことで実践の学生が布川の皆さんに受け入れてもらえていることを感じた」

【考察】

地域の方との距離が縮まり、地域の中に「受け入れられている」という思いを持つことができています。地域の方との関係性の中で、主体的に動き自身のありようを変化させている。地域にとっても、こうした学生が、地域の中に入ってきてくれているということは喜びであり、地域の人たち自身でも地域の持続性を考えていこうとする機運を生むことにつながる可能性を予測させる。

③ 地域存続への思い、「よそ者」としての役割の認識

- ・学生 A「今回のプログラムのような新しい風を起こすことは地域活性化という点において現状維持で止まらないためには非常に重要なこと。少しずつの変化は中山間地域の活性化において大切で続けていかなければならない」
「以前より大学生が都市農村交流を行う意味が分かった」「大人と子どもを繋ぐ役割、企業にはできない役割が『大学生』というものにあると感じた」
- ・学生 B「今ある現状をどうしたら少しでも良い方向に転換できるか、女子大生としてできることは何かなど現地で活動をする中で考えることが多くあった。都会の人が訪れることで魅力的に感じる場所が日本にも数えきれないほどあるとしたら、それはとてももったいない。より都市と農村の交流が表面的でなく、継続的に実施されるような枠組みづくりをしていく必要があると感じた。」
- ・学生 B「もっと都市と農村が直接的に交流できる機会を作りたい、農村の過疎化、高齢化が進む地域を少しでも明るくしたい、子どもの生きる力を届けたい、そのために、私たちが都市と農村の人たちの橋渡し役を担う必要があるのだと現地に行って活動する中で感じた」

【考察】

子どもや若い人が集落にいと、地域に活力が生まれる。「子どもと大人のつなぎ手」という意識を学生が強く持ち記述していることは意義深い。地域を支えるには、その地域に思いを持って関わる人材を循環的に作り

出していく必要がある。そのために世代交流は大切であるが、その意義を、学生自身が活動を通して深く認識をしていることは、この地域を支える人材という意味だけではなく、これから親世代になっていく人たちが、地域の中で世代循環推進の働きかけをする人材となる可能性がある。そのことは、持続可能な地域づくりに大切な基盤となる。

4. 考察—社会関係資本からみた地域連携への視点

本章では、第3章で紹介した実践事例から、地域連携型プロジェクトが学生や地域の社会関係資本の醸成にどのように寄与しうるかを検討し、第2章で捉えた内容をふまえてプロジェクトのあり方の視点をまとめる。

第一に、地域連携活動の根幹となるのは、その地域の「良さ」に触れることである。その「良さ」と、この土地の人的資源の価値、自然や歴史の価値、自然とともに丁寧に人と人が結び合って生きていく暮らしといった「ローカルな知」に根差している。学生は、様々な人や地域資源との関わりの中で、人々が築いてきた暮らしの知恵に触れながら、自分自身にとっての支えとなる個人財としての社会関係資本を得ることができる。

第二に、「誰かのためになる」ことの喜びが、内なる実感として獲得されることの価値である。一例を挙げれば、「日ごろお世話になり自分たちの活動を支援してくれるKさんが、都市農村をつなぐ学生活動を望んでくれている、期待してくれている。それに何としてもこたえたい」という思いから、Kさんが直面している過疎農村の厳しい現状を、都会の参加者の方に少しでも直接感じてほしいと考え、学生は丁寧にその思いをプログラムの中に取り入れて展開した。その結果、土地の人の日々の営みの積み重ねである美しい棚田の風景を前に、参加者の方が心から感嘆し、「すごく綺麗！」との共感を得たことに大きな喜びを感じ、達成感を得ている。「素晴らしい地域だからこそ、その魅力を丸ごと届けたい」という思いが、初めての方にも「届く」ということ、心から共感してもらうことができたという思いの経験は、他者への信頼の思いを高めることにつながると考えられる。

また、日ごろからの助け合いの心から、地元の方からの度重なる差し入れや心温かい励ましを得たが、そうした行為や言葉も、個人財としての社会関係資本の醸成につながると思われる。

第三に、学生が「地域の方のことを思っている」というプログラムが、地域の誇りを感じる人の輪を広げる可能性がある。「学生が来てくれるのは華やかになって嬉しい」という地元の方の言葉は、学生の活動が地元の「内なる主体性」をひきだし、小さな内発的な展開を地域社会に生み出す可能性がある。地域の方との関わりの中で、自らが生かされる喜びを学生が感じることで、地域にとっては、集合財としての社会関係資本を形成する

きっかけとなる。

第四に、「(大学キャンパスのある) 日野とつなぐ」「日野以外の人とのつながりも生まれていけば」「プログラムに参加した方が、この場所のことや今回の体験を『友達に話す』ということをしてくれば」といった、横のつながり、ネットワークの広がりへの思いや期待が学生に生まれている。地域の支え合いを、「思いある人のグループ、コミュニティ」から広げていく。身近なだれかを誘い、現場に行き生活に触れ、土地の人との関わりを通して内側からその内実を捉え、他者に紹介し伝える。結果的に、小さくてもコアなファンコミュニティを作っていく。このようなことの継続が、個人にとっても地域にとっても、生きた社会関係資本となる。

第五に、世代間循環の意義についてである。今回のプログラムには、一般参加者として親子のご参加があったが、その方からのコメントとして「自分が子供のころに毎年夏休みに行っていた祖父母の家のことを思い出した」「棚田という自然と人間の共存関係で創り出された風景が、これほどまでに素晴らしいものだとは思わなかった、大事にしたい」という事後アンケートの記述をいただいている。地域への思いは、親の経験によるという先行研究の知見(要藤 2018)をもとにすると、今回非常に動機付けられたこの参加者が、親として、この後も地域活動を大事にすることにつながる可能性がある。そして、その源となったのは、大学生の地域への深い思いによるプログラム運営が影響している。地域を支える社会関係資本の形成に、学生の地域活動が関与しうることである。

第六に、学生自身が「親世代になっていく」という点からの価値がある。学生が記述する「地域への愛」「人が助け合う仕組み」「相手を敬う心」「地域に受け入れられたと思う喜び」「地域の中で学生ならではの役割があると認識する」といった受け止めは、社会関係資本の形成に大切な要素である。それらの経験は、中長期レベルで見たときの、地域の財産となる。そして、体得した人とともに伝播しうるものであるため、こういう若い人を地域活動により作り出すということは、これから人口減少が進んでいく日本の地域の社会関係資本醸成に意義があると考えられる。

以上のような実践事例に基づく検討をふまえ、社会関係資本醸成の観点からみた、大学の地域連携型プロジェクトの意義と役割として、以下4点を示すことができるのではないかと。すなわち、①地域の主体者となる意識づくり ②地域の人たちとの信頼関係を生み、地域の自立の力を生み出す可能性 ③地域の存続を願うコミュニティの形成 ④次の時代を作る「親世代」となる人の意識を培うことの価値である。そして、社会関係資本の醸成という問題意識をもとに、地域連携型のプロジェクトを考えていくことは、大学と地域とのプロジェクトを持

続可能なものにし、今後の地域社会づくりに資する社会的意義ある取り組みとなると考えることができるのではないだろうか。

5. おわりに

本稿は、学外連携の「質」への問題提起として、社会関係資本の概念をもとに、地域連携型プロジェクトについて検討することを目的とした。

先行研究の知見をもとに学生の実践活動実績を検討した結果、学生の個人財として、また地域の集合財として、大学生の地域連携活動には意義と役割があることが示唆される結果となった。

小田切（2022）は、これからの人口減少がすすむ中山間地域農村の暮らしについて「にぎやかな過疎」という考え方を提唱している。ある地域に思いがある人が、地域内外の人と一緒にになりながら、小さくても面白いコトが次々におこっていくような地域づくりである。そうした現象を生むためにも、地域への主体的な関わりの価値や大切さについて理解をし、社会関係資本を個人としても豊かに持つ人材の育成・輩出が求められる。そして、その素養を身に付けた人材が、自分自身のライフスタイルとして、地域に「にぎやかさ」を生むような関わり方を広げていくことが、個人としても地域社会としても豊かな社会関係資本に満ちた社会を生んでいく。この様子を、田口（2023）は、「ネットワーク型自治」と呼んで、地域自治ができる多様な人材が、ネットワークを広げて地域を支え合っていくようなあり方を提唱している。このようなあり方は、過疎地域の地域維持に限ることなく、これからの地域社会の自立に広く必要な考え方である。大学の多様な使命の中で、持続可能な社会形成に向け、社会関係資本という観点からの地域連携型のプロジェクトを指向し、丁寧に学生を指導して実践をしていくことは、社会的意義ある仕事の一つといつてよいのではないだろうか

最後に、本稿は、限られた文献、限られた事例をもとに検討したものであり、今後、定量的な評価軸の検討なども含め、地域連携型プロジェクトの社会関係資本形成の観点からみたあり方のモデル化を検討していきたいと考えている。

参考文献

- ・稲葉陽二 (2012) : ソーシャル・キャピタル入門、中央公論新社
- ・稲葉陽二編 (2021) : ソーシャル・キャピタルからみた人間関係—社会関係資本の光と影、日本評論社
- ・内田由紀子 (2020) : これからの幸福について—文化的幸福観のすすめ、新曜社
- ・石田光規 (2018) : 孤立不安社会、勁草書房
- ・荻野亮吾 (2022) : 地域社会のつくり方—社会関係資本の醸成に向けた教育学からのアプローチ、勁草書房
- ・小田切徳美 (2022) : 「にぎやかな過疎」を展望する、佐藤洋平・生源寺眞一監修：中山間地域ハンドブック、166-167、農文協
- ・日下まりあ、小原愛子 (2023) : 大学の地域連携における P B L 教育の現状と課題、下関市立大学大学院経済学研究科教育経済学領域、教育経済学研究 Vol.3、68-84.
- ・櫻井あかね、白石克孝、的場信敬、石倉研 (2021) : 大学地域連携の発展プロセスと課題解決へのアプローチ法—洲本市の域学連携事業を事例に一、龍谷政策学論集 10(2)、147-164.
- ・須賀由紀子 (2018) : 地域活性と持続可能な大学と地域の連携—都市と農村をつなぐ活動において—、実践女子大学生生活科学部紀要 55、53-62.
- ・須賀由紀子 (2022) : 大学の地域連携のあり方を考える—持続的農村発展と都市部学生の関係づくりから一、実践女子大学生生活科学部紀要 60、9-19.
- ・田口太郎 (2023) : 少人口・多人数社会におけるネットワーク自治、佐久間康富・柴田祐・内平隆之編著：少人数で生き抜く地域をつくる、学芸出版社、146-161.
- ・田中輝美 (2021) : 関係人口の社会学—人口減少時代の地域再生、大阪大学出版会
- ・内閣府：地方創生（内閣官房・内閣府総合サイト）
<https://www.chisou.go.jp/sousei/about/kankei/index.html> (2023 年 10 月 26 日閲覧)
- ・中平雅也・内平隆之 (2014) : 大学・大学生と農山村再生、筑波書房
- ・中山健一郎 (2023) : 関係人口の創出と持続性に関わるフレームワークの考察、地域活性学会第 15 回大会発表論文集、230-233.
- ・諸富徹 (2020) : 人口減少時代の都市—成熟型のまちづくりへ—、地域社会学会年報第 32 集、16-31.
- ・二階堂裕子 (2020) : 外部人材と地元住民の協創による地域づくりの可能性—岡山県美作市「神山集楽」の実践から—、地域社会学会年報第 32 集、32-45.
- ・林琢也 (2019) : 地域づくりの現場で学ぶフィールドワーク教育の成果と課題、経済地理学年報、第 65 巻、第 1 号、45-60.
- ・古川尚幸 (2022) : 地域と大学が連携した地域づくり—香川大学 Bonsai ☆ Girls Project を事例として— 地域活性研究 Vol.17、67-76.
- ・安田節之 (2011) : プログラム評価—対人・コミュニティ援助の質を高めるために、新曜社
- ・要藤正任 (2018) : ソーシャル・キャピタルの経済分析—「つながり」は地域を再生させるか？、慶應義塾大学出版会

和文要旨

本稿は、持続可能な地域づくりと学生による地域連携活動のあり方への知見を得ることを目的として、社会関係資本の概念に着眼して検討し、地域連携型プロジェクト教育の意義について考察を行った。社会関係資本の基本概念として、「個人財」と「集合財」について押さえた上で、「関係人口」「世代間継承」「社会教育」の3つの観点から、社会関係資本と地域連携活動の意義を整理した。そして、学生が地域活性のため行った実践事例の取り組みの中に、社会関係資本形成の視点からみた地域連携型プロジェクト活動の意義を検討した。

結論として、①地域再生の主体としての意識の獲得 ②地域の人たちとの信頼関係を生み、地域の自立の力を生み出す可能性 ③関わる地域の持続的な存続を願うコミュニティの形成 ④次の時代を作る「親世代である」ということの価値が、社会関係資本醸成の観点からみた、地域連携型プロジェクト教育の意義と役割であることを示した。

2023 年 10 月 16 日受領

